



## 湾岸・アラビア半島ニュース

### サウジアラビア：アブドッラー国王による初の内閣改造

研究員 河井明夫

サウジアラビアのアブドッラー国王は2005年8月の即位後初めてとなる内閣改造および行政機構改革に着手した。今月14日に発表されたこの件に関する複数の勅令は、司法、教育、保健、情報（メディア）、諮問評議会、国軍、最高ウラマー会議、勸善懲悪委員会（所謂、「宗教警察」）といった政府の枢要部門において、「新しい血を注入するもの」（15日付リヤード紙）であった。評論家たちは、政府のパフォーマンスを活性化させ、祖国とその民へのサービスを向上させようというアブドッラー国王の政策の一環として今回の一連の人事に対し賞賛を送っている。

中でも注目されているのが、女子教育担当副教育大臣に初めて女性（ヌーラ・ファーズ）が任命されたことである。ファーズは女性行政研修所の部長を務めていた。他の湾岸協力理事会（GCC）加盟国では女性大臣の誕生が既に実現していることに比べれば何とも遅い歩みではあるが、サウジでも着実に女性の政治進出が進んでいることが今回の人事で確認されたと言えよう。

もう一つ注目される点は、宗教面でのご意見番が揃う最高ウラマー会議のメンバー入れ替えである（アブドルアズィーズ・アール＝アッシュェイフ最高法官は同会議議長として残留）。サウジ国内各地のイスラーム宗派の全てが同会議の中に取り込まれるようになったことがサウジ系メディアで宣伝されている。但し、そこで言われている「イスラーム宗派の全て」の中には、ワッハーブ派至上主義者による宗派差別の犠牲となっているシーア派は含まれておらず、アブドッラー国王の掲げる「宗教間・宗派間対話路線」の前途が長いことを垣間見せたという一面もある。

その他の大きな人事としては、次のようなものがある（注： 部分は評価・コメント）。

#### < 司法部門 >

約7年にわたり諮問評議会議長を務めたサーレフ・ビンフメイドが同議長職を退き、司法最高評議会の議長に任命された。

アブドッラー・ビンムハンマド・アール＝アッシュェイフ司法大臣が同大臣ポストを退き、諮問評議会議長に任命された。

苦情処理院（ディーワーン・マザーリム）長官のムハンマド・ビンアブドルカリーム・イーサーが司法大臣に任命された。

イブラヒーム・ホゲイルが苦情処理院長官に任命された。

現在のサウジ諮問評議会は、サウジ社会のみならずアラブ・イスラーム社会全体で歴史的に定着していた合議制度( シューラー )を近代化する形で 1993 年に設立されたものである。その発足当時から議員として活躍してきたビンフメイドが同評議会から去ることは、今月末に第 5 期( 各期はイスラーム暦で 4 年 )に入る諮問評議会が新たな時代を迎えることを象徴するものと言えよう。

今回新設される最高裁判所の初代長官に、マッカ州の破棄裁判所長などを務めたアブドゥラフマーン・ビンアブドルアジーズ・クレイヤが任命された。

これまでサウジでは、西側の司法概念にある「三審制」というものが完全な形では存在しなかった。それを司法制度上の「不備」として批判されてきたサウジは 2005 年頃から、様々な司法改革を進めてきており、今回新設される最高裁判所は同改革の目玉の一つとして注目されている。サウジの司法ヒエラルキーの中で最高裁判所よりも更に上に位置する司法最高評議会の議長が交代( 参照 )したと併せて、司法改革が漸く軌道に乗ってきたことを意味するものと言えよう。

#### < 司法以外の閣僚レベル >

アブドゥラー・オベイド教育大臣が職を退き、その後任に傍系の王族( His Highness )のファイサル・ビンアブドゥラー・ビンムハンマド・アール=サウードが任命された。

軍人出身で諜報機関の要職に就いていた新大臣の経験が教育部門にどう生かされるのかが興味深い。

ハマド・マーニウ保健大臣が職を退き、その後任に、国家警備隊( ナショナル・ガード )保健局長を務めていたアブドゥラー・ビンアブドルアズィーズ・ラビーアが任命された。

イヤード・マダニ文化・情報大臣が職を退き、その後任に前レバノン駐在大使のアブドルアズィーズ・ハウジャが任命された。

ハウジャは駐レバノン大使として、2005 年のラフィーク・ハリリー元大統領暗殺後に激化したレバノン国内の対立に際し、仲介等を通じて同国内におけるサウジのプレゼンスを際立たせるのに貢献した。ハウジャの大臣昇格は、レバノン駐在時代の活躍に対する論功行賞的な意味合いがあるものと推察される。

#### < 経済・金融部門 >

サウジ通貨庁( Saudi Arabian Monetary Agency; SAMA )のハマド・サイヤーリ総裁が職を退き、その後任に、同庁副総裁のムハンマド・ジャーセルが任命された。

1941 年生まれで既に 60 歳台後半のハマド・サイヤーリは引退する意向だという。25 年以上にわたり同庁のトップを務めてきたサイヤーリが引退し、10 年以上その腹心であったジャーセル副総裁がその跡を継ぐことは、ジャーセル新総裁の下でもサウジの金融政策に大きな変更がないことを予測させるものと見られている。

< 宗教・人権分野 >

厳格なワッハーブ派イスラームの「掟」の執行機関である勸善懲悪委員会のイブラヒーム・ガイス長官が職を退き、その後任にアブドルアズィーズ・ホメインが任命された。

サウジの宗教的「不寛容」の象徴とも言える勸善懲悪委員会に大学生時代から勤務し、そのトップに登り詰めた生え抜きの「ムタワ（勸善懲悪委員会職員に通称）」であるガイス長官の退陣は、アブドゥラー国王の優先課題の一つである「宗教・宗派間対話」に向けた前兆ととらえる見方がある。

2005年に創設された政府内の人権担当機関「人権委員会」のトルキー・ビンハーレド・スデイリ初代長官が職を退き、その後任にバンダル・アイバーンが任命された。

最高ウラマー会議の事務局長にファハド・マージドが任命された。

< その他の細かな人事 >

司法省司法顧問のアブドルモフセン・オベイカーンや、最高ウラマー会議メンバーのアブドゥラー・ムトラクなど6名が王宮府顧問に任命された。

陸軍司令官のフセイン・コベイル中将が参謀次長に任命され、その後任に、今回少将から中将に昇進したアブドゥラフマーン・ムルシドが任命された。

サウジの『リヤード紙』によると、アブドゥラーによる今回の措置は海外でも高い評価を受けているという。フランス・メディアの中には、「サウジを包括的な改革路線に載せようというアブドゥラー国王の真意を反映した措置」といった賛辞を掲げるものや、ヌーラ・ファーズの副教育大臣任命を大きく取り上げ、ファーズの同ポスト任命は、女性の政治進出を内外に印象付けるための単なる象徴的な次元をサウジが飛び越え、高い能力を持った女性がそれに相応しいポストを自らの手でつかんできたことを意味するものなどという解説をしているところもある。

(了)